

研究・調査報告書

報告書番号	担当
384	滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学
題名 (原題/訳)	
Alcohol consumption in the country and hospitalizations for acute alcohol pancreatitis and liver cirrhosis during a 20-year period. 20年間のアルコール消費量と、急性アルコール性膵炎と肝硬変による入院との関連	
執筆者	
Sand J, Valikoski A, Nordback I.	
掲載誌 (番号又は発行年月日)	
Alcohol Alcohol. 2009 May-Jun;44(3):321-5. Epub 2009 Jan 14.	
キーワード	
アルコール消費量、急性アルコール性膵炎、肝硬変、フィンランド	
要 旨	
目的： フィンランドでは 1970-1989 年の間、アルコール消費量の上昇とともに膵炎発症率が上昇した。1990 年代にはアルコール消費量が一時的に減少した。フィンランドにおけるアルコール消費量の推移と、急性アルコール性膵炎と肝硬変による入院率について検討した。	
方法： フィンランドの National Agency of Welfare and Health から 1987-2007 年の入院およびアルコール消費量のデータを得た。	
結果： 1人あたり年間アルコール消費量は1987年の8.2Lから2007年の10.5Lまで増加したが、1992-1994年は不景気のため一時的に低下し、1994年には8.0Lまで低下した。全人口における急性アルコール性膵炎の入院率はこの間有意に上昇した(男57から69/100,000/年、女7から12/100,000/年)。しかし、1996,1997年には入院率が低下した。この期間の肝硬変入院率は男女とも45歳以上の群で上昇したが、アルコール消費量が低下した1994年には一時的に低下した。膵炎の入院率が低下した最後の6年間には、興味深いことに膵炎から肝硬変へのトレンドが見られた。調査期間において肝硬変の男女比は膵炎の男女比の2倍を示したが、女性の相対的割合は両疾患において50%上昇した。	
結論： アルコール消費量に続いて変化する肝硬変とは対照的に、膵炎による入院は過去数年においてアルコール消費量との関連が見られなくなる結果だった。	